

# インクルーシブの窓



令和8年3月 富山県教育委員会 教育みらい室 特別支援教育課

## 特別支援教育コーディネーターリーダーの真摯な取組を紹介します！その⑥



昨年11月に行われた特別支援教育コーディネーターリーダー研修会に参加された先生方の取組紹介の最終回です。

子供の関係者が集まって情報共有の場を設けたことで、今後の支援の課題を明確にすることができた。会議では、ホワイトボードを有効に活用した。(小学校)

ケース会議や保護者面談、アセスメントを通して、子供の教育的ニーズの把握に努め、支援の在り方を検討することを大切にしてきた。(小学校)

勤務校の校内支援体制の維持や活用を通し、特別支援教育コーディネーターの役割を再確認した。また、外部の専門機関との連携により、校内外のリソースに改めて気付いた。(小学校)

定期的に学級担任や教科担当者に声がけをし、相談に乗ったり、校内の特別支援教育支援員との連携を図ったりした。また、特別支援学校のセンター的機能を活用し、具体的な助言を得ることができた。(中学校)

通級担当と子供の様子等について情報交換をするなど、日ごろから教職員との話をしやすい環境づくりに努めた。(小学校)

生徒とスクールカウンセラーとの面談の日程や内容等について連絡調整を行っている。また、近隣小学校のケース会議に参加するなどして、個別の教育支援計画の作成や整理に活かしている。(中学校)

特別支援教育コーディネーターとして持続可能な取組を考えた。通級による指導の対象生徒の授業での様子や自立活動の指導内容について、校内での周知を図るなどの連携に努めた。(中学校)



6回にわたり、特別支援教育コーディネーターリーダーの先生方の取組を紹介してきました。取組は他にもたくさんあるのですが、その全てが、多様な子供たちや保護者、校内の教職員や関係機関と「子供真ん中」の対話を重ね、「専門性」を発揮しようとする先生方自身の学びの意欲に支えられていることを実感します。

現在、次期学習指導要領の改訂に向け、中教審教育課程部会の特別支援教育ワーキンググループによる議論が進められており、その委員である野口晃菜氏（一般社団法人UNIVA 理事）は、「特別支援教育の専門性」について次のように述べておられるので紹介します。

「多様性の包摂」をどこから始めるのかわからない、という方はまず、多様な子どもの声を聞き、それを学校の中で可視化していくところから始めるのはどうだろうか。「声」は音声や言葉だけではない。その子なりの表現を踏まえた多様な声をいかに可視化できるか—これは特別支援教育の専門性である。

<引用> 野口晃菜「多様な子どもの声を聞き可視化する」『特別支援教育研究』全日本特別支援教育研究連盟編集、2026年1月号 巻頭言